

---

# おまじないに想いをのせて

正木 慶史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おまじないに想いをのせて

### 【Nコード】

N4104R

### 【作者名】

正木 慶史

### 【あらすじ】

少しドジで内気な女の子、東川 ちひろ。少女はクラスの人気者の男の子に憧れています。

ある日、その憧れは恋に変わりました。

それは昔々のお話、ではなく本当は現代のお話なんです。

ある中学校に、一人の女の子がおりました。女の子の名前は東川ちひろちゃん。眼鏡をかけた、普通の女の子です。

いえ、一つだけ普通ではないところがありました。それは、彼女が近年稀にみるドジな子だということです。

彼女は、平坦な道でつまずき、素晴らしい滞空時間で宙を舞った後、ぐきゅっと声を上げ地面にへばりつきます。オリンピックですっこの競技があれば、日本代表はおろか金メダルを3大会連続で獲得し、『東洋のキング of ドジ』の異名で呼ばれるであろうほどの飛びっぷりです。

そんなちひろちゃんですが、気になる人がいます。同じクラスの山村 健くんです。

健くんは、少し軽い性格ですが、明るく人好きのする性格とバスケットで鍛えた、程よく筋肉のついた体を持つ美男子です。

ちひろちゃんは、そんな彼に憧れていました。いつもクラスの中心にいる彼。最初はただ憧れ、教室の片隅でひっそり遠くから眺めるだけでした。

しかしある時、憧れが好意に変わりました。

それはちひろちゃんがいつものように、何もない所でこけた時の事。ちひろちゃんは、いつものようにいくつかの嘲笑を受けました。ちひろちゃんは、恥ずかしいやら情けないやら、なんとか目から涙が溢れないよう立ち上がりとしたところ、ちひろちゃんに手がさ

しのべられたのでした。

ちひろちゃんが顔を上げると、何を隠しましょう、手をさしのべた人物は健くんでした。

「ちひろちゃん、大丈夫？」

ちひろちゃんは驚きました。手をさしのべられたのもそうですが、健くんが自分の名前を知っていたのも驚きです。

同じクラスとはいえ、まったく接点のない私の名前を覚えてくれていたなんて。ちひろちゃんの胸には、暖かい気持ちが生ええました。

「あつ、ありがとうございます……」

ちひろちゃんは、少し消えそうな声で言いました。

「いいっていいって。困った時はお互いさまでしょ」

健くんは、朗らかに笑って答えます。ちひろちゃんの憧れが、恋に変わった瞬間でした。

その後、一つの奇跡がありました。席替えで、ちひろちゃんと健くんは隣同士の席になったのです。ちひろちゃんは驚きました。好きな人がすぐ隣にいて、休み時間には話しかけてくるのです。

ちひろちゃんは響く心臓の音が健くんに聞こえないよう祈りながら、健くんの話に答えます。



さてさて、ここで健くんのお話をしますと、彼もちひろちゃんに特別な想いがありました。

ある日健くんは、先生に頼まれ図書室に本を運びました。

この図書室は利用者が少なく、放課後の図書室は閑散としてました。

仕事を終えた健くんは、静かでもいいなあと思い、椅子に座りました。少し居眠りをしようと思ったのです。

すると、目の前で本を読んでいる女の子が同じクラスの子だということに気づきました。

たしか東川さんって言ったかな。と思いながら、健くんはちひろちゃんを眺めます。

ちひろちゃんは、本に集中しているので、健くんの視線には気づきません。

健くんは思いました。東川さんって意外と表情が変わるんだな、と。ちひろちゃんは、読んでいる本の主人公になりきって本を読むクセがあるので、読みながら泣きそうになったり、笑ったり、つらそうな顔をしたりします。東川さんって可愛いな。子犬みたいにころころ表情が変わって。健くんはそう思いました。

それから健くんは、毎日図書室に行きました。読みもしない本を手にも、ちひろちゃんを眺めます。

本に集中しているちひろちゃんは、とても幸せそうです。とろけてしまいそうな笑顔で本を読んでいます。幸せな恋愛小説でも読んでいるのでしょうか。

いいなあ、あんな笑顔を俺にも向けてくれないかな。健くんはそんな風に考えました。それは自分自身、自覚していない想いでした。

ある日健くんが校内を歩いていると、ちひろちゃんがころんでいるのを見つけました。

「ちひろちゃん、大丈夫？」

健くんは気付けばそう言って手をさしのべていました。

「あつ、ありがとうございます……」

「いいっていいって。困った時はお互いさまでしょ」

健くんは笑ってそう言いながらふと考えました。あれ、俺はなんでちひろちゃんと呼んでいるんだ？

しかし健くんは、まあいいか、と考えを放棄してしまいました。うっかり者の健くんは忘れています。クラスの仲のよい女子に対してさえ、名字でしか呼んでいない事を。



ちひろちゃんはある日こんな話を聞きました。消しゴムに好きな人の名前を書き、1カ月相手にバレなかったら両想いになれる。

他愛もない恋まじりですが、ちひろちゃんは、黒のサインペンで、ちっちゃく「山村健」と書きました。叶わなくたって別にいい。けど、望むくらいなら。そう考えて、ちひろちゃんは消しゴムを両手でやさしく覆います。

しかし、そんなときに限って運命の女神様はいじわるです。

「ねえ、ちひろちゃん。消しゴム貸してくんない？ 今日忘れちゃってさ」

笑顔でそう言ってくる健くん。

「む、無理です……」

「いや、ちょっとだけだからさ。ほら、手に持ってるじゃん」

しかしそれはどだい無理な話。ちひろちゃんの消しゴムにはケースがなく、見ればすぐに健くんの名前が書かれているのがバレてしまいます。

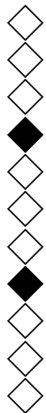
バレてしまえばおまじないの意味もないし、自分の片思いがバレたらせつかく友達になれたのに、その友達という関係さえなくなってしまう……

ちひろちゃんは、涙ぐみながら首を横に振ります。

「……そうかよ、分かったよ」

健くんは、ぷいっと前に顔を向けて、黙りこくってしまいました。

ちひろちゃんは、バレなくてよかったと思いつつ、健くんの気分を損ねさせてしまったのを悲しく思い、俯いてしまいました。



放課後。健くんは不思議でした。なんで俺はこんなに不機嫌なんだろう？消しゴムを貸してというお願いを断られたくらいで、普通はこんなに嫌な気分になることはないのに。

少し苛ついたまま、健くんは家にも帰らず、校舎をうろついてました。今日は日課であるちひろちゃんを眺める事もできません。

下校時間になり、チャイムがなりました。帰ろう。健くんはそう思





顔がありました。

「ちひろちゃん、大丈夫？」

この前と同じ台詞。しかし、健くんは心の中にある気持ちと、次にどう言えばいいか、やっとわかったようです。

「やっぱりさ、ちひろちゃんは危なかしくて見てられないよ。誰かが傍にいないと、怪我しちゃうよ」

「だから、お願い。俺を君の傍にいさせて？」

これから先は二人だけの世界。作者はここで筆を置きましょう。私から言えるのは次の2つだけ。

王子様の胸に抱かれたお姫様は、唐突な告白とキスに、恥ずかしいやら嬉しいやらで、赤面してしまったこと。

そして運命の女神様は、なんだかんだ言って最後には恋する二人に微笑むものだということです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4104r/>

---

おまじないに想いをのせて

2011年3月8日17時40分発行